

ぐりーんず greens

第31号

2022.5 発行

理念：地域社会に信頼される病院としての心温まる医療と急性期・高機能・先進医療との調和

基本方針

- ・本学の理念である「至誠と愛」に基づき、皆さまに信頼される病院を目指します。
- ・患者さんのプライバシーを守り、一人ひとりの権利を尊重します。
- ・つねに最先端の医療技術と知識を用いて、安全で良質の医療を提供します。
- ・患者さんに合った最善のチーム医療を行います。
- ・中核病院として地域の診療所・病院等との連携を推進し皆さまの健康を維持・増進します。



病院長ご挨拶



まずは、八千代医療センターの日頃の運営について、ひとかたならぬご支援とご理解を賜り、誠にありがとうございます。コロナ禍におきまして、皆様方に直接お会いして八千代医療センターの現況をお話しできないことを心苦しく思います。このことをまずは紙面をお借りして深くお詫び申し上げます。また、この紙面上で現況を少しでもお伝えでき、さらなるご理解を賜れば幸いと存じます。

さて、令和2～3年度は、新型コロナウイルスという、今までわれわれが経験したことがない病禍に対応しなければならない辛い2年でした。この病禍は、次々と新たな変異株を生み出し、その対応に医療だけではなく、社会・経済や人間の精神面でも、さまざまな打撃を全世界中の人々に与えてきました。これによって、医療供給体制だけではなく、社会構造の変革も余儀なくされるに至っております。

当センターもリウマチ・膠原病内科を中心にした有志によるコロナ対策チームを作り、患者様や医療従事者が、院内感染が起こらないように厳重な注意を払い、さらには救急医療をはじめとする日常診療に影響がでないように、細心の注意を払って診療を継続しておりました。しかし、令和3年3月に重症度と介護度が高い患者様が数多く入院する病棟で発生した院内感染から、十数名の感染者を連続して出すに至ってしまい、クラスター発生届けを習志野保健所に届け出いたしました。救急外来、コロナ患者の受け入れ中止や一般入院を一時休止し、さらなる厳重な感染症対策を行った結果、速やかに感染は終息いたしました。その後、4月には救急外来の再開、一般入院や重症なコロナ患者の受け入れを含めたほぼ通常のクラスター以前の診療体制に戻ることができました。また、その後、院内の医療従事者に対するワクチンの接種も順調に進み、パートナー企業の方々も含めてほぼ100%の方に3回の接種を完了することもできました。また、八千代市在住の医療従事者の方のワクチン接種もほぼ終了しております。その結果、3月の院内感染を最後とし、重大な感染者は出しておりません。この期間、外来や入院などに関して、多大なご迷惑とご心配をおかけしたことを、深くお詫び申し上げます。まだまだ、面会の制限などの感染予防措置は取られておりますが、欧米のワクチン接種率が高い国と同様に、徐々に緩和措置が取られてくると思われれます。ただし、感染力の高いオミクロン変異株が出現してより、院内の職員のご家族、特にワクチン接種率の低い若年層を中心とした家族内感染が起っておりますので、コロナの終息までには、まだ少しの忍耐と注意が必要かと思われれます。

このようなコロナによる混乱と女子医大への報道の影響で、内科系の医師・看護師の離職が多く、医師・看護師不足から外来・入院診療に不都合を生じてきていることは事実です。ただし、医師・看護師の急募は行っておりますのでいずれこの事態は徐々に終息してくると存じます。その間、患者様におかれましては、診療科や外来の縮小などで一時的にご迷惑をお掛けすることになるかと存じます。この点は、重々お詫び申し上げますとともに、この辺の事情をご推察いただき、ご理解を賜りますように、何卒お願い申し上げます。

幸いなことに救急・集中治療科は、後ほどご紹介する様に相星教授以下4名の常勤医を確保することができました。

このように徐々ではありますが、内科系の医師の欠員が補われてくると思われまます。

また、近い将来皆さまと対面で、医療センターの様々なことにご助言を賜れる日がくることを心待ちにしております。

最後に、皆様方のご多幸とご健勝を心より祈念して私の挨拶とさせていただきます。

令和4年5月

東京女子医科大学附属八千代医療センター
病院長 新井田 達雄



救急科科长 就任のご挨拶

科長・教授 相星 淳一



このたび東京女子医科大学附属八千代医療センター救急科科长を拝命しました相星淳一と申します。前職の東京医科歯科大学附属病院救急災害医学から3名の救急専門医を伴い、4月1日に着任しました。

経歴でございますが、1989年に日本大学医学部を卒業後、同年6月に日本医科大学付属病院高度救命救急センターに入局し、救急科専門医、外科専門医を目指して研鑽を重ねてまいりました。1997年には米国コロラド州デンバーにあるデンバーヘルスメディカルセンター外傷センターに留学し、腸管虚血再灌流後の遠隔臓器障害の発症機序や保存血輸血中に含まれる炎症性脂質メディエータに関する研究を行いました。帰国後も大学院生の研究を指導しながら、科研費などの公的資金を獲得して研究活動を継続しています。2006年、現東京医科歯科大学救急災害医学分野の主任教授である大友康裕先生と私を含めた3名の医局員は東京医科歯科大学附属病院に救命救急センターを立ち上げるため異動しました。翌年には東京都内23番目の救命救急センターとして認可を受け、さらに、2009年度の厚生労働省による全国救命救急センター機能評価で全国1位を獲得し、その後もトップレベルを維持しています。当初は7名だった医局員数も100名近くまでに増え、八千代医療センターを含めて6カ所の救命救急センターを運営する医局に成長しております。

2019年暮れ、中国の武漢を発端に世界中に伝播した新型コロナウイルス感染症は依然として終息をみない状況です。2020年3月、東京医科歯科大学は新型コロナ肺炎患者を積極的に受け入れる方針を固め、同年4月4日から中等症、重症患者の受け入れを開始しました。私はコロナ重症病棟の統括として、2年間にわたり入院・転院の調整、手術を含む集中治療などを担当しました。2022年3月末日までに277名の重症患者を治療し、救命率は85%と良好な治療成績をあげています。前職に引き続き、八千代医療センターでも中等症（Ⅱ）や重症コロナ患者の治療を担当することになりました。行動制限を伴わないゴールデンウィークが明けて、第7波への突入も懸念されていますが、救急科として全力を挙げて対応していく所存です。

私の専門領域は救急医学、急性期外科、外傷外科でございます。急性期外科とは、外傷や急性腹症に対する緊急手術や集中治療を行う診療科と理解していただければと存じます。今後、当科でも急性腹症や外傷患者の診療にも積極的に対応していきたいと考えております。今しばらくはコロナ診療を余儀なくされますが、八千代医療センターの各診療科、地域の医療機関、行政と連携をとりながら、八千代市や周辺地域の救急医療の安定化に寄与できるよう努力していく所存でございます。どうぞ、よろしくお願いいたします。

眼科・小児眼科科長 就任のご挨拶

科長・准教授 篠崎 和美



本年4月に、船津英陽教授の退任に伴い、当院に眼科科長として赴任致しました篠崎和美です。

生まれは母の実家に近い大阪堺市で、育ちは父の勤務先の大学病院のあった京都、でも碁盤の目から外れた桃山です。大学から、祖母の出身校でもある東京女子医科大学にきました。息子は、本院の院内保育と近傍にある至誠会保育園、若く美しい女性医局員や元気な男性医局員にも助けられて無事成長しました。

大学卒業後東京女子医科大学眼科に入局し、本年3月まで本学の校舎・本院のある新宿河田町で長く過ごしてきました。この間、至誠会第2病院、国立横浜病院、朝霞中央病院に数か月～1年の出向、角膜ヘルペス、ぶどう膜、糖尿病網膜症、黄斑と専門の異なる4人の教授の下で眼科の研鑽を積んできました。

一方、大学病院ということから、初期研修センターや学生教育に、また、眼科領域の医療情報の標準化や院内の電子カルテ委員会などにも長く携わってまいりました。

眼科は全身との関連性が高く、全身の中の眼、眼から全身を診るという意識を大切にしております。さらに、その眼球は直径20数センチの臓器ですが、眼科は奥深く、幅広く、内科的側面・外科的側面を持ち合わせ、新生児から高齢者まで診る診療科です。その中で私は、涙液はじめ眼表面の絶妙な機能、微生物と人とのバランスに魅せられ、ドライアイ、感染症をはじめ角膜結膜疾患、眼瞼、涙道などの前眼部疾患を中心に診療・研究に取り組んできました。一方、小児の将来を左右する小児眼科にも入局時より関わってきました。また、ぶどう膜、糖尿病網膜症、黄斑変性を専門とする教授の教室に在籍する中で、現在の医療の可能性と限界のなかで残った視機能、失った視機能と付き合いながら人生を過ごすロービジョン患者さんと向き合うことも多くなり、ロービジョンのケアの重要性を感じ、福祉施設との連携も取りながら取り組んできました。

当院眼科では、科長は交代しましたが、睫毛内反、結膜炎、角膜炎、ドライアイなどの前眼部疾患、糖尿病網膜症、黄斑変性、網膜剥離などの眼底疾患、緑内障、白内障、小児眼科、ロービジョンなど、今までと同様に幅広い診療ができるようにと、5名の常勤はじめ眼科医局員一同、力を合わせて対応をしています。当院が小児医療に重点をおいていることから、以前より小児眼科に重きをおいてきました。斜視や弱視の視能訓練に欠かすことのできない視能訓練士（ORT）の協力を得ながら、この特徴も大切にしていきたいと思っております。前任の船津先生が糖尿病網膜症はじめ後眼部を専門とされ、私が主に前眼部を専門とすることから、本院で黄斑・網膜硝子体疾患を担当していた荒川久弥も、私と一緒に河田町より4月より異動してまいりました。本院でも後輩から慕われていた先生で、心強いところです。

今まで同様に『女子医大に来て良かった。』とさせていただけるよう、日々の診療、研究、教育に取り組み、地域の皆様、患者さん、学生や職員が集まり、愛される八千代医療センターでありたいと思っております。それぞれの地域ごとに環境も様々で、医療体制や必要とされる医療も異なることを、日本眼科医会を通して学びました。八千代市、千葉について知識や理解を深め、地域の先生方、メディカルスタッフ、住民の方々の声に耳を傾け、ご指導ご鞭撻をいただきながら、本院の経験や連携を活かしながら、この地域で必要とされる医療を提供できるように精励したいと思います。どうかよろしくお願い申し上げます。



せん妄、認知症の心理行動症状の予防のための取り組み

高齢者や認知症を持つ患者さんは、身体の不調や環境変化によりせん妄や認知症行動心理症状（BPSD）を発症する事が多くなります。当院では心身医療科医師・認知症看護認定看護師を中心にMSW・薬剤師・リハビリと協働しせん妄予防サポートチームを運営しています。当チームは、せん妄・BPSDの予防やせん妄からの早期離脱ができるよう多職種と連携しケア方法の指導・提案及び薬剤

調整を行っています。急性期病院のため治療が優先となり、時に身体拘束を実施し治療をおこなっている現状があります。身体拘束を実施せず患者さんが安心して治療が行えるように代替案を該当病棟のスタッフと一緒に考えケアを行っています。

いつでも、誰もが相談できるように日々スタッフを会話と行い、病棟看護師がためらわず直接心身医療科医師へ相談連絡ができる関係性を構築する事ができています。また、医師から認知症看護認定看護師へ相談も増えてきております。こういった垣根のない、関係により、対象患者さんに早期介入がされ、せん妄の増悪を予防する事ができています。

また、精神看護専門看護師・認知症看護認定看護師を中心にせん妄・認知症リンクナース連絡会を開き、成人が入院する部署、入退院支援部に所属するリンクナースが定期的にせん妄や認知症のケアについて検討を重ねています。昨年度からは、せん妄の予防とともに患者さんの尊厳を守るべく、身体拘束の低減に取り組んでいます。本年度はせん妄から離脱した患者さんに直接せん妄状態であった時の思いを聴き、グループワークを通し気づきの共有を行いました。気づきを共有したことで、患者さんの尊厳について考え、身体拘束に疑問をもち、ケアを考え直す機会を得ることができました。これにより実践に変化が現れ、身体拘束をせず看護介入するための代替案を考え実践する事が多くなっています。

これからも、患者さんの尊厳の維持・早期退院ができるよう患者さんを中心としたチーム活動をしていきたいと思っております。



お知らせ

ご紹介の際は、紹介状（診療情報提供書）をご用意頂き、事前のご予約をお願い致します。

医療機関からの診察・検査連携のご予約（地域連携直通）

TEL 047-458-6543 FAX 047-458-6545

受付時間 平日 9:00~17:00・土曜日 9:00~13:00

※日曜、祝日、第3土曜日、創立記念日(12/5)、年末年始(12/30~1/4)はお取扱しておりません。

※時間外の場合はFAXを送信して下さい。翌受付時間内にご連絡させて頂きます。

※予約日時・医師等の変更を希望される場合は前日までにご連絡下さい。



医療連携マネージャー（医師）

緊急を要する当日（日中）のご紹介は、紹介診療科が定まっている場合は従来通り当該診療科の医師が対応します。

担当診療科の特定がしにくい場合は、「医療連携マネージャー」が電話対応をさせて頂きます。

ご対応は地域連携直通電話の受付時間内とさせて頂きます。

患者さんからの診察のご予約（予約センター）

TEL 047-458-6600

受付時間 平日 9:00~16:00・土曜日 9:00~12:00

※日曜、祝日、第3土曜日、創立記念日(12/5)、年末年始(12/30~1/4)はお取扱しておりません。

※予約日時・医師等の変更を希望される場合は前日までにご連絡下さい。

やちよ夜間小児急病センター（中学3年生までの小児対象）

TEL 047-458-6090

受付時間 毎日 18:00~23:00

医療相談は行っておりません。ご予約の必要はありません。受付時間内に直接ご来院下さい。

検査連携（医療機関から申込）

検査連携のご依頼は地域連携直通電話の受付時間内とさせて頂きます。

応需検査：CT、MRI（単純）、RI、XP、マンモグラフィー、骨密度測定、セファロの画像検査



東京女子医科大学

八千代医療センター

TOKYO WOMEN'S MEDICAL UNIVERSITY YACHIYO MEDICAL CENTER

〒276-8524 千葉県八千代市大和田新田477-96

TEL 047-450-6000(代表)

TEL 047-458-6545

入退院支援室 TEL 047-458-6543(直通)